

# ONE PICTURE MANIFESTO

マイヤ・タンミ(Maija Tammi)

ハッリ・パルヴィランタ(Harri Pälviranta)

マルヤ・ピリラ(Marja Pirilä)

マイヤ・アンニッキ・サヴォライネン(Maija Annikki Savolainen)

---

## 『One Picture Manifesto』

*One picture is a work of art.*

*It is concise and includes all that is needed.*

*It suggests and reacts, provides responses, and renders new trails for thoughts.*

*It is an opening and a closure.*

*One picture.*

*No more is needed.*

一枚の写真がアート作品である。  
必要なすべてが、簡潔に含まれている。  
提示し、呼応し、回答し、新たな思考の道筋を描きだす。  
始まりであり、終わりでもある。  
一枚の写真。  
これ以上に必要なものは無い。

---

—『One Picture Manifesto』は、どのようなきっかけで始まったのですか？

タンミ:

「一枚の写真が作品に成り得るのか」という問いに対し、批評的に査察することを目指しています。アート写真の領域では、一つの作品において10~15点の写真を要しシリーズとして発表する手法が一般的です。でも、全く異なる全体像を描いて、上記よりも少ない点数での構成でシリーズを制作したら、もしくは一枚の写真だけの構成で作品をつくったとしたら、作品の水準を満たさないとみなされるのでしょうか？ アーティストが自分自身に作品制作者としての資質を問うことが本企画の核です。

パルヴィランタ:

私にとって一枚の写真というのは非常に矛盾が大きく、扱うのが難しい存在だと感じています。これまで常にシリーズ単位で制作をしてきましたし、マイヤ(・タンミ)の言う通り、写真表現における基準や制約、写真そのものの厳密な定義に一石を投じたい、と私たちは考えています。私は、一枚の写真よりも一つの作品という視点で考察することが多いです。蓄積されたたくさんの欠片が一つの作品を形づくるという考え方で、シリーズをこれまで捉えてきました。たった一枚の作品をつくるというタスクを与えられた今、とても悩ましい状況ですね。

タンミ:

このマニフェストはある意味、アーティストが自分自身に挑戦を突きつけることを目的にもしています。

パルヴィランタ:

同時に、私たちは写真を見るという行為に対しても疑問を投じています。ドラクロワの絵画のような作品でもない限り、私は一枚の写真作品を観察するというのは難しい行為だと思っています。

タンミ:

シリーズ性(連続性)が、関心の喪失につながってはいないかという点についても、考える価値があると思います。

パルヴィランタ:

もちろん、時代毎にそれぞれ異なる表出の文化や表現の流行が存在しますが。

タンミ:

今の時代、一枚の写真を前にして立ち止まる人はあまりいないでしょう。私自身、ひとつの展覧会をみるときには全体像を把握すべく会場をさっと歩くことが多く、一枚一枚の前で立ち止まることはほとんど無いように思います。

ピリラ:

私は常にシリーズ単位で制作に取り組んできたんですが、それは作品をつくる上で「自然な方法」だったからです。そのプロセス自体が私にとっては重要で、長く取り組んできたカメラ・オブスキュラのプロジェクトではたくさんのイメージが生まれて、行き詰まってしまうことも、驚くこともたくさんありました。この企画への参加依頼を受けてすぐに、どの1枚がこの企画の問いにはまるだろうかと考え始めました。自分の過去の作品シリーズを再分析したり、新たな視点から見返していたりする自分にも気づきました。

サヴォライネン:

私は、この4人の中でもっともプロジェクトに対して懐疑的だと思います。私の制作手法は企画に参加している他のアーティストたちのそれらとは異なるので、4人でのディスカッションは興味深いですね。確かにアート写真の業界は窮屈で、伝統を重んじる傾向にあると思います。業界の中での自分の居場所や、自分自身が取り組んでいることを発信する方法を見つけるのに苦労してきました。私は画像をつくりだすプロセスや光の動きに興味があり、自分の作品を展示する際は、展示空間や鑑賞者の空間的な体験についてよく考えます。結果として、展示空間は最終的には一つの作品、一つのインスタレーションになります。また、膨大なアーカイブを作るために、大量の資料を作成し、時折それらを見返したりもします。自分が最初に作品として選びとった写真よりも、隣の写真に惹かれることもあります。また、20年後にこの1枚が壁にかかっているだけで満足できるのか、写真単体で成立しているのか、ということも常に考えています。そのために、写真を常に目に見えるところに置いておくようにしています。

ーマイヤ・サヴォライネンの作品には何らかの制約を設けたのでしょうか？

パルヴィランタ:

もちろん、そんなことしません。この企画の意図は、アーティストたちがそれぞれの解釈で独自に作品を作ること。展示では作品一点につき一面の壁が割り当てられ、アーティストたちが各々の空間を持ちます。

タンミ:

床面も自由に使えます。

サヴォライネン:

他のアーティストの作品がどんな空間体験を生み出すのか、また自分がそんな空間にどうやって介入したり言及したりしようかと今からとても楽しみです。

ー皆さんにとって、一枚の写真とはどのようなものなのでしょうか？

サヴォライネン:

私にとってはいろいろな意味があります。「何かを見た瞬間」や「光が移った瞬間」が写真であると考えたりしますね。人間は、その瞬間を長く感じたりします。

パルヴィランタ:

私はごく保守的なアプローチを取りました。様々な要素によって構成された一枚の作品を、フレームに収めるという手法で制作しています。

ピリラ:

今の「フレームに収める」という表現が興味深いと思いました。つまるところ写真とは、「物質性のないメッセージ」であると私は考えています。展示する際に作品を木材とガラスに入れるのは、単に作品保護のためというか。

タンミ:

各作品における共通点は、私たちが書いたマニフェストです。

パルヴィランタ:

マニフェストは、全ての物事に光を照らすプリズムのようなものだと思います。個々人では一つずつ作品を作っているけれど、最終的には4点の作品が生まれる。それぞれの作品がどう互いの領域に踏み込んでいくかは私たち自身でもコントロールできませんし、その様子を眺めるのが面白いですね。

タンミ:

このプロジェクトでは、各アーティストが未発表の新作を制作することが前提です。ただ制作に入る前に私たちは文章を、すなわち「マニフェスト」を書き上げました。幾度となく文章は編集され、内容についての議論が行われました。その結果たどり着いたのが6つの文。定義について、また私たちは何について触れたいのか・触れたくないのかなども、話し合いました。『One Picture Manifesto』では、「picture」は展示される物理的な現象であり、一方で「image」は頭のなかで形作られるものとしています。フィンランド語の「kuva(絵、写真を指す単語)」には、このような意味合いの区別はありません。

パルヴィランタ:

当初は、すべてを説明し尽くす宣言文を書こうとしました。単一で完結する一枚の写真という概念を理解するためにマニフェストを書き始めたのですが、そのようなものを作り上げるのは不可能でした。内容は挑発的な主張の連続で、皆を一つの考え方に従わせようとするもの。私一人でさえ矛盾を抱えてしまうのに、4人の人間がここに関わっているんです。結果的に、マニフェストはとても政治的な内容になったと思います。

—現在の情勢は、デジタル化がもたらした結果だと思いませんか？ ツールの開発によって膨大な量の写真を作りだすことが可能になり、それがシリーズでの作品発表を再ブーム化させていると思いませんか？

サヴォライネン:

そこかしこでとてつもない量の写真が溢れかえっている現状について、言及したいとは考えています。日々私たちは、ターボエンジン付き台風のようにメッセージが飛び交い押し寄せるような状況の渦中を進んでいるようなものです。そんな混沌の中に安らぎの瞬間など見出せるのでしょうか？

パルヴィランタ:

はい。瞑想的な瞬間はあるのでは、と思います。

—例えば、明らかな「写真的な世界観」を持ちながらも、シリーズには属さない個々に独立した作品を制作するアーティストについてはどう思いますか？ そのような世界観の中で個々に制作される作品は『One Picture Manifesto』が目指すものに当てはまるのでしょうか？

パルヴィランタ:

基本的には当てはまると思います。ただ一方で、写真家が持つ表現のレパートリーという点で、一つの要素が一つの作品内に提示されるわけではなく、レパートリーの大部分を占める複数の要素が一つの作品を構成しています。写真の世界の基本原則がすでにシリーズ性(連続性)を示唆していますね。

—『One Picture Manifesto』はコマーシャルアートの論理にも当てはまると思いませんか？

サヴォライネン:

なんとも言いづらいますが、商業の側面はこの概念には関係のないように思えます。

パルヴィランタ:

アートの市場といえどその領域は多岐に渡るので、あらゆる種類の論理が比較対象になり得るのではと思います。

—このプロジェクトで、鑑賞者に何をもちたらしたいと考えていますか？

タンミ:

新たな視点で物事をみることでしょうか。

ピリラ:

80年代のことを今でも鮮明に覚えています。当時は写真がアートとして認識されておらず、写真家たちによる展覧会というのが美術館やコマーシャルギャラリーでは受け入れていませんでした。その時代は、写真界の中でさえもアーティスト一人につき一点しか紹介されなかったりしたものです。シリーズとして提示すること、個人のスタイルを持つことが、アーティストとアマチュアを差別化するポイントでした。一点ずつのみを展示するこの展覧会で、鑑賞者の多くは驚嘆の面持ちで私たちの取り組みを目の当たりにすることになると思います。

タンミ:

「驚嘆」って、良い表現！

パルヴィランタ:

画像で溢れかえるこの時代に、写真作品を作ることは時代への抵抗かも知れません。私は物事について考え、煮詰めて答えを導くやり方に惹かれます。例えば、アーティストがそれぞれ一枚ずつのみ作品を発表するとなったとき、個々のサイズが大きくなるように。一点のみを制作する場合、アーティストはその作品によりじっくりと対峙することができます。その時間をかけることで、作品は自らアーティストに語りかけ始めるのです。ただ「一枚の写真は千の言葉に匹敵する」というような表現には、苛立ちを感じてしまいますが。

サヴォライネン:

先ほどもお話したことですが、私が考えるのは空間体験と鑑賞する時間についてですね。「ある決定的な瞬間」がもたらす影響については、私は否定的な考えです。というのも、ダイナミックな動きを捉えた写真であっても、物体のコンポジションを捉えた写真であっても、そこに写っているのは「ある決定的な瞬間」ではなく、別のなにか決定的で感動的な存在であるような気がするからです。

ピリラ:

決定的な瞬間を捉えた構図は、鑑賞者を立ち止まらせ作品をじっくり見せるのに効果的です。そういう作品には複数の文化的・歴史的な層が存在していると思います。ハッリ(・パルヴィランタ)の写真もその一つだと思います。

パルヴィランタ:

その通りだと思います。でも、良い写真を見つけだすことについて渦巻く議論についていくのは一苦勞。少し写真の研究をかじっている状態だと、写真作品を見たままの存在として鑑賞することが難しくなってしまいます。文脈も重要で、美術館を取り巻く環境や、現代アートの文脈がその写真に作用します。しかしながら、常にこのような重厚なインフラを通して写真を理解しなくては行けないのか、とってしまいます。

ーマルヤ(・ピリラ)さんからカメラ業界についてと、そこで企画される展覧会では一作家につき一点しか紹介されなかったという話がありました。80年代にアートとしての写真が再度確立され、作品のシリーズ性(連続性)や個人のスタイルという点を通してプロとアマチュアの差別化が生まれました。このことについてどう思いますか？ この連続性の誕生は、フォトジャーナリズムによっても拍車がかかったと思いますが。

タンミ:

アート界の動きは、永遠に続く振り子運動のようなもので、一つの動きが起こるとそれに対抗する別の運動が必然的に生じます。

サヴォライネン:

一定の種類の制作物においては、連続性や連続的な物語が生まれるのは自然なことだと思います。フォトジャーナリズムがいい例です。もし写真表現または展覧会自体をメディアムとして捉えるならば、一点だけの写真にも、物理的・空間的、さらにはコンセプト的にも場を与えてやるのが目指すべきゴールになります。

ー今回の展示で発表される作品について、どのように制作に取り組まれたのか少しお話しいただけますか？

タンミ:

このプロジェクトはアーティストが自分自身に課題を課すこと、また、一つの写真だけを展示するということが課題を孕んでいる、という考え方をきっかけに始まりました。この小さなマニフェストによって事実上私の取り組みのすべてが変わり、私がアーティストとしてやってきたことのすべてを見直すきっかけになりました。

サヴォライネン:

会期はまだ先なので、自分の制作プロセスと呼べるものはまだありません。これまで、常にどこであっても私自身の考えるアートを具現化させるという活動をしてきました。今回の一点の作品のために、何か特別なことに挑戦しようとする考えていません。アーティストとしての収入で生活していくことがすでに大変です。

タンミ:

私の作品は、3つのバージョンの制作を経て完成しました。

パルヴィランタ:

私は三つの異なるテーマに沿って、各テーマにつき一点ずつ制作しました。選んだモチーフは他の作品を制作中に副次的に生まれたものです。今回のプロジェクトでなければ、このテーマに触れることはないと思ったので。

ピリラ:

今回の制作は興味が尽きず、挑戦的で、難しくもありました。自分のつくっているものが何なのか、自分自身でも確信が持てていないのですが、その状況こそが今作の醍醐味です。今回のテーマは、私自身長い時間をかけて取り組んできたことでもありました。すでにフレームを一つ処分して、ガラスも捨ててしまいましたが、今作がきっかけで、そのシリーズが復活することもあるかも知れません。

タンミ:

ここにいる皆が個々で作品を制作していますが、グループとしての取り組みでなければ本プロジェクトは実現できませんでした。このマニフェストがさまざまな有意義な議論が生まれるきっかけになりつつも、それら議論のいずれもこのマニフェストが持つ要素をすべて紐解くことはできないでしょう。

---

インタビュアー:

レータ・ハーラヨキ (Reetta Haarajoki) フィンランド写真美術館  
ティーナ・ラウハラ (Tiina Rauhala) フィンランド写真美術館

和訳:

KANA KAWANISHI ART OFFICE, LLC.